

芦屋大学論叢 第73号
(令和2年9月16日)抜刷

自閉スペクトラム症（ASD）の心理アセスメント

－三つの仮説理論と感覚過敏・鈍麻を基底に－

林 知 代

自閉スペクトラム症（ASD）の心理アセスメント

－三つの仮説理論と感覚過敏・鈍麻を基底に－

林 知 代

1. はじめに

自閉スペクトラム症（ASD 以下本論では ASD と記す）の特性はあくまでも「スペクトラム」で、定型と非定型の境目は明瞭ではない。特に知的能力が普通以上で言語能力も遅れはない場合、本人の、環境との異質感は見逃されやすい。成育歴でも殊更環境が劣悪でもなくむしろ何の問題もないとされる養育者のもとでさえ、後に ASD の子どもにとっては安心感や保護されている感覚が充分でなかったと意識されることがある。愛着システムにおいては、養育者が養育や躰においてどのように子どもを取り扱ったのかの行動もさることながら、子ども自身の情動や身体の状態、子どもの内的体験にどのように応答されたかという相互関係が重要となる。鋭敏な五感覚と、傷つきやすい感受性を持つ子どもは往々にして平均的外的刺激が不安と怖れの内的体験となる。養育者とのずれが ASD においては往々にして生じやすいのはこうした主観的感覚である内的体験が養育者の想像と異なっているからと言えよう。ASD の多様な特性を説明するために心理学的仮説が提唱されており、そのうち、①実行機能不全仮説、②中枢性統合の弱さ仮説、③心の理論障害仮説は主となるものである。加えて、④感覚の過敏性と鈍感性がある。これは臨床の現場では本人や関係者からの聞き取りにより馴染みの特性である。

2. クライアントの面談までの経緯と状況

20 代成人女性 A は、幼児期から手先が器用な反面、スポーツは苦手で「運動神経は鈍い」とのことであった。幼児期は自らせがんで本を何冊も読んでもらった。幼年期は正義感が強くリーダーシップをとり活発に過ごした。しかし小学校高学年から元気がなくなり優秀さを担任が認めないことや自分が親切にした行為を感謝されないことへの憤りがきっかけで不登校状態になり、担任が訪問し無理に登校させたことで完全な登校拒否となった。母親を激しく嫌悪する反面手足として使い、自分の考えを理解しないと行って激しく責めた。高校までの不登校期間中、独学で3か国語の日常会話学会話レベルを習得、本も多量に読んだ。ただやり始めると疲労困憊しきるまで止まらない。楽しみで始めても義務になり拘束感に悩まされる。情緒的にも身体的にも不安定であった。しかし筆者とのインテーク時、会話に違和感はなく A は一見、定型発達とされた。こうしたグレーゾーンに位置すると思われるクライアントについて、十分な観察及び検査を丁寧に実施することによって、外見上では分かりづらい当人の生きにくさへの理解の一助とすることが可能である。ASD 特性が起因する日常のストレスやフラストレーションから心的疲弊感をきたしていると推察される A に対して、上記4つの特質に係る心理検査を実施し、特性についての考察を深めていく。提供事例については A の承諾を得ている。

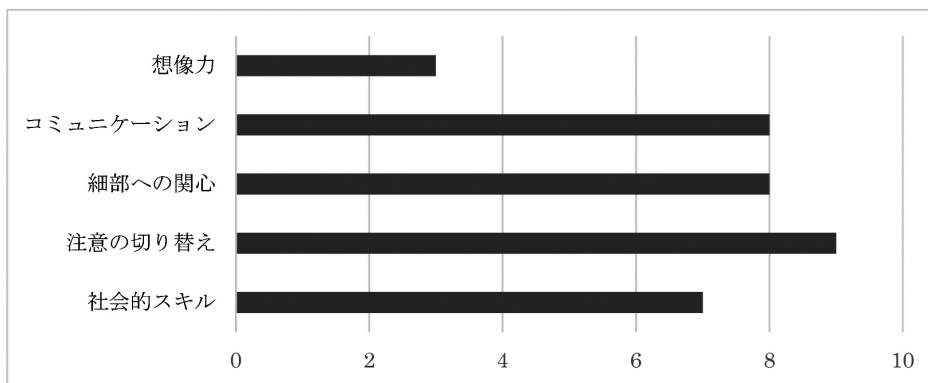
3. AQ (Autism Spectrum Quotient) 自閉症スペクトラム検査

自閉症スペクトラム指数 (AQ) は, Baron-Cohen, Wheelwright, Skinner, Martin, 及び Clubley (2001) によって自閉症の特性を持つ通常知能の成人の自閉度合いを測定するために考案された。日本語版は若林昭雄により日本版として構造化された。自閉スペクトラム症のスクリーニングテストとして使われている。「社会的スキル」「注意の切り替え」「細部への関心」「コミュニケーション」「想像力」の5つの下位尺度を備えている。若林らは3つのグループ分けをして調査をした結果から以下の目安を作った。

- ① 33点以上：発達障害の診断がつく可能性が高い。日常生活に差し障りがあると思われる。
- ② 27～32点：発達障害の傾向がある程度ある。一部の人は日常生活に何らかの差し障りがあるかもしれない。
- ③ 26点以下：発達障害の傾向は特にはない。日常生活を差し障りなく過ごせている。

A の場合、以下の結果を得た。

<グラフ1 AQ 検査結果>



【結果と考察】

A の合計得点は35点であった。5項目における特長として、まず、注意の切り替えの項目得点が非常に高い。これは1つのことに夢中になってほかのことが目に入らなくなる、ということと、同時に2つ以上のことをできないという点と関係している。日常ではパーティや会合などで会話が次々に変化していく場面では、注意の切り替えが困難な為に複数人での会話についていけないということが生じる。また、注意の切り替えの困難さが起因する現象として、何かをしているときに邪魔が入るとそれまでやっていたことに戻るのが難しいことがある。考えられるのは、注意が分散しないことによるため、もしくは一つのことに過度に集中してしまうためという可能性がある。

注意の切り替えの他に得点が高かったのは、コミュニケーションと細部への関心の項目である。細部への関心では他の人は気が付かないような小さな物音に気付くことがしばしばあり、これは聴覚との関連が考えられる。状況、例えば部屋の様子や物の置き場所などの変化にすぐ気づくという点では視覚刺激との連動が見られる。細部への関心と注目、関心がどうしても狭小的になりやすい傾向を示すと同時に、緻密で細かな作業の遂行に表れる。A は幼少時より器用にはさみを使い工作が大好きで成人した今でもイヤリングを作ったり服を作ったりするのを趣味にしている（趣味にとどまらず完璧な遂行が目的になってしまうというのが現実であるが）。また車のナンバーや時刻表の数字など、一連の数字などの情報に注意が向くことや、数字や番号についてのこだわりがあることがよくある特性と細部への関心との重複化と思われる特徴、家族

や友人などの誕生日を人一倍大事にしたり、自分の誕生日や記念日を忘れられると周りは些細なことであっても非常に傷ついたり気持ちが落ち込んだりすることに繋がっている。

コミュニケーションでは、気軽な会話が苦手であるという点は、分散的でまとまりのない社交的会話は切り替えの難しさとも重なるところである。冗談がわからないことがあり、ことごとく真面目に受け止め周りと浮いてしまう場面の体験もあり初対面の人には緊張したり、相手が退屈しているときや沈黙が続くとどのように話をすればいいかわからなかったりすることがある。

4. 発達障がい重複性テスト結果

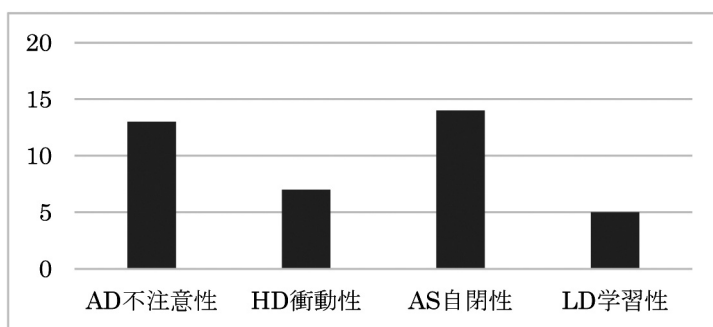
本検査は、林が自身の臨床例をもとに三浦（2019）の協力を得て妥当性と信頼性について検討を重ねたものである。根底に、発達障害の構成領域といわれているAD(不注意性)、HD(衝動・多動性)、AS(自閉性)、LD(局所的学習障害性)特性を下位項目としている。各領域は単独で生じるのではなく、重複性があるとの臨床上の経験に基づくものである。

得点は総合計で

- ① 35 点以上：発達障害の診断がつく可能性が高いといえる。日常生活に差し障りがあるだろう。
- ② 27～34 点：発達障害の傾向がある程度。日常生活に差し障りは左程ないと思われるが、ある領域が突出して高い場合は差し障る可能性もある。
- ③ 26 点以下：発達障害の傾向は微弱で、日常生活にも差し障りなく過ごせている。

A の検査結果は以下のようなようだった。

<グラフ2 A の発達障害特性重複テスト結果>



【結果と考察】

AD（不注意性）13点、HD（衝動・多動性）7点、AS（自閉性）14点、LD（学習の偏り性）5点の合計得点は39点であった。タイプとしてはASADタイプといえる。AD特徴として複数の作業の優先順位をつけられないという点について、まず些末事に注意が向くためすべてが重要さにおいて等しくなるということが考えられる。次に対局的、客観的な視点から見通しを立てて考える仕方が難しい点が挙げられる。これは整理整頓が苦手、片付けられない、という特性にもつながっている。手先の器用さに反し運動神経としてはどちらかというと不器用で、あちこちよくぶつかるなどに見られるのは前庭感覚と関係があるとも考えられる。

HD傾向としては強くはないが、意識していないと人が質問する前や、し終わる前にだしぬけに発言する傾向がある。認知の高さでカバーできるレベルかと思われる。実際、やり取りの中で不自然さは感じられな

かった。ただ、意識しすぎるとしゃべりたいのにしゃべり切れないというフラストレーションを生む可能性があり、気を付けたいところである。伝え方のスキル、つまり知能テストの言語性能力が高いので伝えるための言葉表現を活用して身に着けるのも一つかと思われる。

AS が発達特性の中でも最も得点が高い領域である。興味関心を持つと時間を忘れて没頭する、新しい変化に馴染むのに時間がかかるなどは、AQ 検査での説明と重なる。五感の鋭敏性については、感覚プロファイル検査と併せて後述する。

5. 知能テスト(WAIS-IV)結果

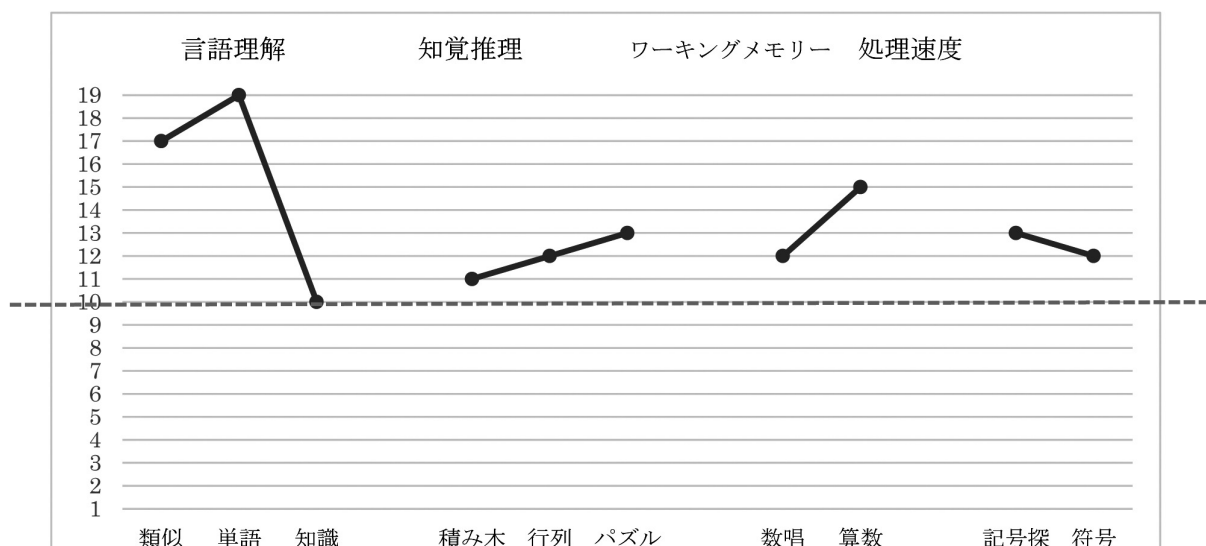
WAIS-IV 知能検査は、WAIS-III 成人知能検査の改訂版である。15 の下位検査（基本検査：10、補助検査：5）で構成されており、10 の基本検査を実施することで、全検査 IQ (FSIQ)、言語理解指標 (VCI)、知覚推理指標 (PRI)、ワーキングメモリー指標 (WMI)、処理速度指標 (PSI) の 5 つの合成得点が算出できる。今回は本人の負担も考慮し、10 の基本検査で結果からディスクレパンシー比較、強みと弱みの判定などを行った。

下位検査評価点は以下の結果を得た。

【表 1 WAIS-IV下位項目評価点】

	類似	単語	知識	積み木模様	行列推理	パズル	数唱	算数	記号探し	符号
評価点	17	19	10	11	12	13	12	15	13	12

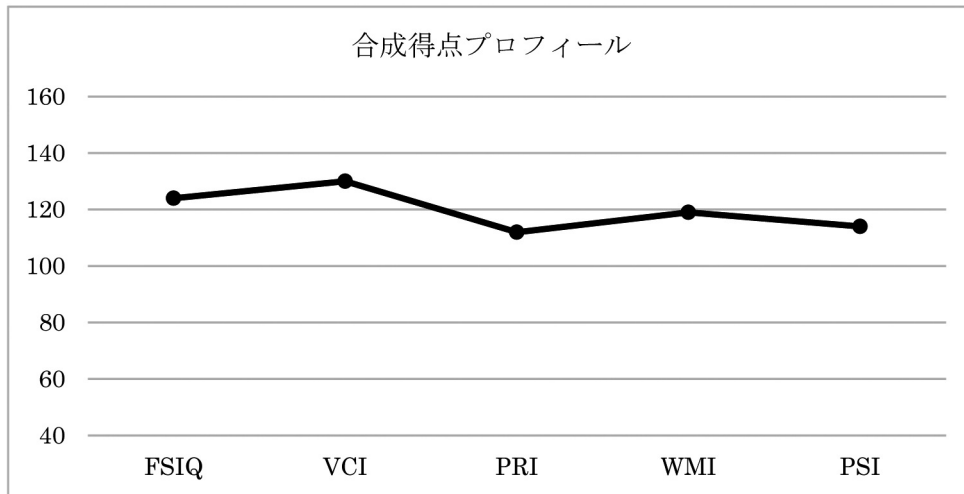
<グラフ 3 WAIS-IV検査結果>



下位検査の評価点プロフィール

(---は平均を示す)

<グラフ4 合成得点プロフィール>



	全検査 (FSIQ)	言語理解 (VCI)	知覚推理 (PRI)	ワーキングメモリ (WMI)	処理速度 (PSI)
合成得点	124	130	112	119	114

全検査 (FSIQ) は 124 であった。群指数間において大きな差はなかった。A が大学で得た高い評価は言語理解の能力が高く、これが反映されたものであると言えよう。評価平均値は 13.4 で、評価平均より 3 点以上の下位検査を S (強み) とすると、S は類似と単語である。また評価平均より 3 点以下の下位検査を W (弱み) とすると、W は知識である。言語理解以外の群指数において土で極端に低いものがない。すべて平均して普通以上の得点が出ている。言語理解 VCI は言語概念形成、言語推理、環境から得た知識を測定するもので合成得点は 130 という高得点が出た。しかし各項目別にみると言語理解内の格差が大きいことがわかる。習得知識を示す知識 10 と言語概念形成を示す言語理解 19 との差が 9 と 1 つの群内で大きな差異が出た点に注意する。臨床経験から自閉症スペクトラム特性を呈するクライアントが往々にして知識で他の下位項目に比べ低い得点になる場合がある。これは、自閉特性における興味と関心が自分に向くことと関係するかもしれない。長期記憶に残る結晶性能力において、語の取り込みは非常に優れている一方、現実社会で自分の関心が向かない部分では頭に残らないという現象が起こるのかもしれない。このギャップのため、事実を見極める前に、<単語>が示す言語表現や単語知識や言語概念形成が優位に働くと同時に、<類似>が示す言語推理、理解、記憶、重要な特徴と重要でない特徴の区別が施行に影響を与えられられる。他方、<知識>が示す一般的事実に関する知識を獲得し保持し引き出す能力が弱いと、言語表出と現実感のアンバランスを生じやすいと言えるかもしれない。事実や一般的知識に基づく社会的関連付けをする場合、事実より言語が優位に働き自分の中で概念化された思考によって事実と齟齬が生じると考えられる。逆唱は聴覚的レジストレーションと知的操作の能力 (レジストレーション、系列化、注意、聴覚的弁別、チャンキング、視覚化) を要するので、逆唱は順より知的操作能力への負荷が大きくなる。A の記憶法は音によるレジストレーションの後チャンキングするという過程を取っている。プロセス観察という点からは、繰り返しの問題文の求めが算数問題であり、中盤での注意の持続の途切れと切り替えのための言語情報処理調整、もしくは不安感の表れが生じたともいえる。全体に落ち着いて積極的に取り組む姿勢が見られた。疲労の影響はなかったと考える。

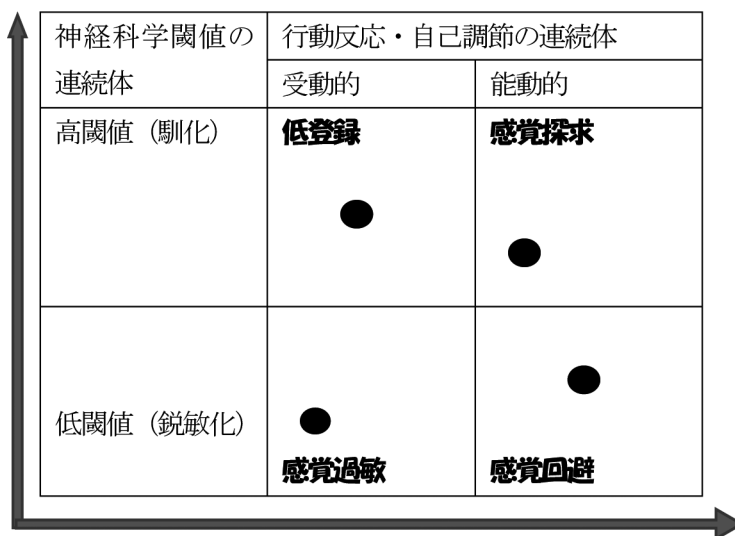
6. SP (Sensory Profile 感覚プロフィール)

DSM-5 診断基準にはく自閉スペクトラム症の特徴の一つに感覚刺激に対する過敏さまたは鈍感さ、または環境の感覚的側面に対する並外れた興味（例：痛みや体温に無関心のように見える、特定の音または触感に逆の反応をする、対象を過度に嗅いだり触れたりする、光または動きを見ることに熱中する）>という項目があり、DSM-5 の改定により ASD の感覚過敏が広く認められるようになった。本検査は、これまで临床上では重要な自閉症スペクトラム（発達障害特性の重複性という視点からは、AD や HD にも感覚の過敏性・鈍感性を有すると言える）の特性の一つと思われてきたこの感覚についてのアセスメントを行う際に役に立つ。A の結果は以下のようになった。

【表2 象限別スコア結果】

	象限1	象限2	象限3	象限4
アイコン	低登録	感覚探求	感覚過敏	感覚回避
スコア合計	35	25	51	25
	普通	低い	高い	普通

行動反応・自己調節と神経学的閾値の関係（Dunn W. 1999）は以下のようになった。



【結果と考察】

行動反応・自己調整においては能動的な感覚探求が低く感覚回避は平均な範囲であった。一方、受動性の感覚過敏の閾値が低く低登録は平均である。受動性感覚過敏性が高く感覚探求が低いと出た。これは、外観的に刺激に対する反応は目立った行動や反応は強く出ないが刺激の影響を強く受けることを示している。刺激に対する過敏性が高いというのは、神経学的閾値が低く、新しい刺激に注意をそらされる傾向があることを意味する。例えばやり遂げようとしていることを刺激によって容易に邪魔される。結果、神経が逆立ったリ苛々したり腹が立ったりなどの反応が現れる。神経系が過敏反応してわずかな刺激にもすぐ気づいてしまい、通常なら生活環境上のプロセスを経て馴化へ進むレベルの刺激を、過剰刺激として体験する。馴化のメ

カニズムが多くの人と異なると言える。こうした場合、更なる刺激慣れさせるのではなく、刺激を取り除くことに注意を払うことが大事になる。つまり本人を変えさせようとするのではなく環境の有り方に注意を向けるということである。このことに気づかないと、絶えず過剰刺激の中に晒されることになり注意散漫、動揺、不注意などの状態に陥る可能性がある。馴化へ向かう為には、今・現在の感覚の反応レベルに添ってスモールステップで行かねばならない。

A の場合感覚過敏がある一方、感覚探求は低い。感覚探求が低いということは寡動で、環境に関わっていかないように見えることを示す。見た目には刺激に対して反応していないような動き方になるということである。多動特性と真逆な像といってもよい。日常では、刺激過敏なため安全性を考え過ぎることと感覚探求が低いことが重なり動けないということが起こりうる。神経が不活性化の状態、動作がおっとりしてみえたり身体の位置や動きが敏速に機能しないことが生じる。感覚過敏の強さと感覚探求の低さの二面性が A の特徴である。一見動きが少なくどちらかという不器用でよく言えば落ち着いているように見えるので、他者からは、刺激に過敏に反応している状態を理解されにくい可能性がある。

7. 総合考察

ASD 特性は本質的には同じとはいえパーソナリティの個々の違い同様、多様に表れることが仮説を 1 つに特化できないことにも示されている。提唱されている ASD の心理学的仮説は、特に「心の理論障害仮説」「実行機能障害仮説」「中枢性統合の弱さ仮説」であり、これら 3 要素に加え「感覚の過敏と鈍感」の 4 領域を基底に捉えることで、個々の特性の表れ方が解り、的確な支援を可能にできると思われる。心理アセスメントのための検査バッテリーや観察の視点、聞き取りの応答に関して何を軸にするかの一助となる。

まず、「心の理論障害仮説」とは、他者や自分の心の状態（信念、願望、意図など）を読む基礎的な能力の障害であるとする説である。人は他者との関係を円滑に行う上でこの能力が助けになっている。Stern D. の発達論という Domain of intersubjective relatedness 領域つまり生後 15 か月ごろに芽生える社会的自己領域にあたりと考えられる。通常、この時期に獲得されるはずの、自他の心の状態をキャッチする能力の発達が ASD では遅れているため、対人行動で不器用さや異常が生じることになる (Baron-Cohen, 1985)。結果、場の状況や文脈を他者と共有し、自己、他者、対象の関係性を把握できず、本人は関わりを求めるともかわらず人間関係を構築できない。ただ、心の理論では欠損が生じているとの流れから、その後の研究で欠損ではなく遅れであるということが明確になったため、Baron-Cohen (1995/2002) はこの「心の理論障害仮説」を「マインドブラインドネス仮説」という理論に修正している。DSM-5 (精神障害の診断と統計マニュアル) では、スペクトラムという捉え方で自閉性を扱っている。しかし心の理論という視点から見ると、自閉症とアスペルガー症候群レベルでは非常に格差があり、後者では心の理論の発達がゆっくりとながらも経験を知的能力・認知能力を使って振り返ったり他者を観察したりして現実に適応的に心の理論を獲得していく例が散見される。その場合も臨床体験から考えると、自然に獲得するというより、意識的に学ぶという工程を経る。一方、自閉症では心の理論を獲得するのは、認知能力を考えると非常に困難であることが推察される。その質的共通性はマインドブラインドネスということである。

本事例において、マインドブラインドネス仮説の状態を明らかにするため、バッテリーに AQ 検査を加えている。A の場合、思春期の社会的関係性の成長過程である重要な時期に“心の理論”を使えなかったという事実があり、支配するかされるかという極端な人間関係で失敗した心理的傷を残している。筆者との

面接では、不自然さはなかったが、それはAにとっては多くの失敗と関係性の手順やルールを意識化し理屈付けするプロセスを経てのことであり、AQ検査の結果を見ると、コミュニケーションへの分らなさの数値が高い。Aの場合、会話は何ら不自然ではなかったが、後日語られたことは、細心の注意を払ってようやく、ということであり強い疲労感で帰宅後寝込んだとのことであった。また日常では字義通り性の傾向を自覚しており、状況に応じた言葉の裏にある感情に思い至らないため、他者の気持ちと自分の気持ちの境界が曖昧で混在が生じる。WAIS-IV結果でも明らかである非常に高い単語能力が、ある意味マインドブラインドネスを見えにくくしているかもしれない。心の理論の領域を獲得するのに多くの同年齢の人とは質的な違いがある。他者との情緒的関わりは、相手の立場や心的状態を把握したり共感したりというやり取りではなく、同一化や自分に向かう空気の察知能力を通して行っているようだ。ユーモアを理解するとか、相手が話したがっていることを見抜くとか、皮肉やうそを見抜くといったようなことは非常に難しい。

2つ目の仮説は、ルリヤ（Алекса' ндр Рома' нович Лу' рия）の「実行機能障害仮説」（1973/1978）である。実行機能とは活動をコントロールする能力のことであり、学習上における実行機能とは次の4つの内容、①望ましい目標を設定する、②目的を達成する合理的な手順を考える、③他のものに気を取られず、物事に専心する、④その結果が最初の目標とどこまで一致しているのかを検討する、という能力を指す。ASDの場合、この4つの実行機能に問題があるとするのが、「実行機能障害仮説」である。

Baron-Cohen（2008/2011）は自閉症やアスペルガー症候群の人たちの特性についてシングルフォーカス（単焦点）という言葉を用いて生活上の二重焦点を維持の困難や同時遂行能力が低い可能性について述べている。注意の切り替えが困難であるということは、新しい場面に順応しづらく、日課や行動の順序が邪魔されると強く当惑するなどに関係してくる。たとえできたとしても、定型発達者が抵抗なくできるレベルの切り替えや変化に適応したり馴化に強い意志力や意識化を要するといえる。本人も気づかないうちに疲労を蓄積することになる。周りを気にせず自分の思うように没頭、遂行できると、満足感や成就感を得られやすい。

これら実行機能に関しては、面接での観察もさることながら、筆者の発達重複性検査のなかでも傾向として把握することができる。AQ検査にもその項目がある。また、知能検査においてはワーキングメモリーの下位項目とも関わってくる。しかしワーキングメモリーの高さが自己制御（セルフコントロール）に関連し、ワーキングメモリー容量の低い人よりも上手く注意制御・実行機能に優れており、課題目標の維持や競合解決において高い成績を示す（村方、2012）。この点について、Aは119と平均より高い数値を出しており、慣習的に行っている行動への固執について、目立つほどでなく日常生活が送られているものである。AQ検査において「注意の切り替え」型の項目に高い数値で出たということは、Aが実行機能に困難を感じる場面が多いということの意味する。つまり途中で程よく切り替えができない。これは学童期及び七年期前期の学校を主体とする生活では、授業内容ではなく目まぐるしく授業科目が変わること、さらに教室が変わることについていけない、もしくはついて行っても易疲労感が蓄積することと関係する。児童期から思春期にかけての実行機能の発達においては、慣習的行動への固執の克服、刺激を目の前にした反応的な制御から刺激不在でも事前の準備を行う順向的制御へ、外的駆動型制御から内的駆動型制御へという3つの変化が現れ、より柔軟な行動を行えるようになるが、こうした変化も、「マインドブラインドネス」の発達同様、時間を要すると考えられる。心理的安寧感とのバランスが難しいところである。

3つ目にFrithら（1994）による認知心理学的な考え方である「中枢性統合の弱さ（weak central coherence）仮説」である。いわゆる木を見て森を見ることができないとの比喻を用いて語られることがある。部分の集まりから全体を捉えたり、社会的状況の背後にある文脈を捉えたりする能力、つまり全体像をとらえる能力が中枢性統合であり、前頭葉機能の一つだとされている。知覚情報を処理する際に、部分の処理や細部に集

中するやり方をとるため、処理の全体優位性が二次的に低下すると考えられている。中枢性統合の機能はさまざまな情報を統合して、文脈の中でより高次の意味を構築する働きを指す。全体像や文脈を無視して、部分に注目するという ASD に特徴的な情報処理スタイルで、ASD においては全体の意味を見出そうとすることよりも部分に部分のまま関わろうとする傾向が強い。A が高い単語力をはじめとする知能の高さに関わらず、細部にとらわれ文の要約が苦手であるとの発言は、中枢性統合の弱さも感じていることがわかる。中枢性統合の弱さは同時に周りに頓着しないで部分を見ることに優れる能力とも言え、A が誕生日や記念日をよく記憶していて自分の誕生日を忘れられていると落ち込みが強かったり、知り合いの程度でも誕生日を記憶していて贈り物をするなど記念日や誕生日を特別に大事にする特徴は、その背景に、全体像としての文脈から得られる手がかりを利用できず、断片化した情報として捉え ASD の意味を伴わない機械的記憶に優れる事と関係していると考えられる。ASD においては、さまざまなレベルの情報を統合して全体の大きなまとまりとして捉えることが困難で、断片化した情報として理解するために、文脈や社会的状況の理解が困難になる。このことがコミュニケーションの日常会話や社交の場での会話を苦手とする一因になっているともいえる。優先順位がつけられないことは整理整頓が苦手、片付けられないという ASD 特性にもつながっている。A に関して言えば知的能力が高いので、意識し手順を学び、落ち着いた状況を維持することで社会的には充分適応的に生活できるだろう。

以上三つの症状仮説は自閉スペクトラム症の典型的な特性であり、通常 A に見られるように重複していると言える。そしてよりシンプルな情報処理を担う神経ネットワークと関係が深い感覚に関する感覚（過敏や鈍麻）症状もまた ASD 特性として含まれる。感覚過敏に関しては、これら三つの症状仮説では説明できず ASD の特性として DSM-5 診断基準にも次の記述によって明らかにされる。「感覚刺激に対する過敏さまたは鈍感さ、または環境の感覚的側面に対する並外れた興味（例：痛みや体温に無関心のように見える、特定の音または触感に逆の反応をする、対象を過度に嗅いだり触れたりする、光または動きを見ることに熱中する）」刺激に対して感覚が鋭敏に働くことと外国語習得は無関係ではない。

A の言語に関する能力は、WAIS 結果の〈単語〉の特典がとりわけ高いことから明らかであるが、この能力に聴覚と知的能力の重なりが独学による語学の習得へ導いたと推察できる。一方、外的刺激を過敏に知覚するということは不安と恐れを抱きやすいとも言え、安心感を得るためには十分な保護機能が必要となる。乳幼児については不安と恐れに対し保護機能が働くとき、なだめられ抱えら安心感を得ることは、Bowlby の愛着理論によっても明らかであるが、乳幼児の生存にとって必要不可欠な身体的親密さは、単なる身体的感覚ではなく情緒的な意味を含む。こうした愛着対象への接触は成人においても、人間にとって一生を通じて重要であると考えられる。しかし成長に伴いこの親密性は暦年齢不相応の幼児性とか依存性というように見られてしまう。親子の相互的にかかわりは、乳幼児期や学童期のみならず継続するが、ASD の子どもは特に発達第 1 の仮説であるブラインドマインド特性があるため、子どもの特性に情動的調律をするということは、同暦年齢の健常児とのかかわり方と異なる。それを理解していないと、親を制して「心配し過ぎ」「支配し過ぎ」「甘やかしすぎ」、また反対に不適応な対応の結果「親の為に子どもがつらい目に合っている」「怒り過ぎ」「拒否的過ぎ」などと言われがちである。周囲とのずれが大きくなると尚更である。親の子どもへの応答や言動は批判的になる。しかし神経質で育てにくい子どもであったということは、子どもの内的体験ニーズが、通常よりも配慮を要し対応も異なってくることを意味している。

「安心感 felt security」は自分が行為の主体者であること、自分の感情や情緒はどのような状況でも自分に属するものであること、過去・現在・未来を通して連続していること、が基盤になる。今後、A の支援やニーズに対して、A が主体的かつ安定した心理状態を画するためには、A 自身の自己理解もさることなが

ら両親が A を見直すことが重要になる。それは同時に親自身の内省と深く関わってくる。これらの発達がゆっくりな ASD にとって、自他の境界の曖昧さは混乱を招くものとなる。今後の心理療法の中で親子両者の関係性の在り方に注目する必要があるだろう。

【参考文献】

- American Psychiatric Association (2013) : Diagnostic and statistical manual of mental disorders. 4th ed. Washington D.C.
高橋三郎・大野裕監訳 (2014) : DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引. 医学書院.
- Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Skinner (2001) : The Autism-Spectrum Quotient (AQ).
- Baron-Cohen, Simon (1997) : Mindblindness: An Essay on Autism and Theory of Mind (Learning, Development, and Conceptual Change).
- A. R. ルリヤ (1973) : Основы нейропсихологии / ルリヤ 鹿島晴雄 (1978) : 神経心理学の基礎: 脳のはたらき. 医学書院. (第2版, 1999).
- 三浦正樹, 林知代 (2019) : 発達特性質問紙の信頼性・妥当性の検討. 芦屋大学論叢 Vol.72, pp 81-95.
- Bowlby, J. (1969). Attachment and Loss, Vol. 1 Attachment. London : Hogarth Press. 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子 (訳) (1976). 母子関係の理論①愛着行動. 岩崎学術出版社.
- Bowlby, J. (1973). Attachment and Loss, Vol. 2 Separation: Anxiety and Anger. London: Hogarth Press. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子 (訳) (1977). 母子関係の理論②分離不安. 岩崎学術出版社.
- Bowlby, J. (1979). The Making & Breaking of Affectional Bonds. London: Tavistock Publications. 作田勉 (監訳) (1981). ボウルビィ母子関係入門. 星和書店.
- Bowlby, J. (1988). A Secure Base: Clinical applications of attachment theory. London: Routledge. 二木武 (監訳) (1976). 母と子のアタッチメント 心の安全基地. 医歯薬出版社.
- Frith, U (1996). : Social communication and its disorder in autism and Asperger syndrome. J Psychopharmacol 10:48-53., Frith, U., & Happé, F. (1994). Autism: beyond “theory of mind”. Cognition, 50; 115-132.
- Frith U. (1989) : Autism : Explaining the Enigma Second Edition. Blackwell Publishing. 富田真紀, 清水康夫, 鈴木玲子 (1991) : 新訂自閉症の謎を解き明かす. 東京書籍
- 林知代 (2011) : 心理臨床におけるアセスメント視座. 芦屋大学論叢 Vol.55, pp 81-95.
- Stern D. (1985): The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. New York : Basic Books, Inc.
- American Psychiatric Association (2013) : Diagnostic and statistical manual of mental disorders. 5th ed. (DSM-5). Washington DC : American Psychiatric Association. 高橋三郎・大野裕 (監訳) 染矢俊幸・神庭重信・高橋三郎・大野裕・染谷俊幸 (訳) (2014) : 精神障害診断・統計マニュアル DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引. 日本精神神経学会. 医学書院.
- World Health Organization (WHO) (1994) : ICD-10 the 10 th revision of the International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems (ICD). American Medical Association. 中根允文/岡崎祐士/藤原妙子/中根秀之/針間博彦訳 : (2008) ICD-10 精神および行動の障害.
- Dunn W. (1996, 2006) : Sensory Profile. NCS Pearson, Inc. 辻井正次監修 (2015) : 日本版感覚プロフィール. 日本文化科学社.
- Wechsler D. (2010) : Technical and Manual for the Wechsler Intelligence Scale. NCS Pearson, Inc. USA. 上野一彦, 藤田和弘, 前川久男, 石隈利紀, 松田修 (2010) : 日本版 WAIS-IV 智囊検査理論・解釈マニュアル. 日本文化科学社.